



いっとうしょうぐう
一燈照隅
まんとうしょうこく
萬燈照国

はや師走。壁に掛かるカレンダーも残り一枚になりました。せわしなさが募るこの頃になると、1年の来し方を振り返ることが多くなります。

「これがまあ ついのすみかか 雪五尺（小林一茶）」。
江戸の生活を捨て故郷に定住する決意と、雪の重さが未来への言い知れぬ不安を表現している、一茶51歳の作といわれています。

さて、「一燈照隅」とは、一隅を照らすということです。
「一隅を照らす」とは、比叡山を開かれた伝教大師・最澄の著書の中にある言葉です。
一隅とは私のいる場所のことです。自分の置かれている場所です。一杯努力し光り輝くことを意味します。

「萬燈照国」とは、初めは一隅を照らす灯火でも、その灯火が十・百・千・万となれば国の隅々まで明るく照らす

ことができるという意味です。

「徑寸十枚 これ国宝に非ず、一隅を照らす これ則ち国宝なり」

「徑寸」とは、金銀財宝のことで、お金や財宝は国の宝ではなく家庭や職場など自身自身が置かれたその場所です。一杯努力し、明るく光り輝くことのできる人こそ、何物にも変えがたい貴い国の宝であるといっています。

一人ひとりがそれぞれの持ち場で全力を尽くすことによって、社会全体が明るく照らされていきます。

この言葉には、自分のためばかりではなく、人の幸せを求めて「人の心の痛みがわかる人」「人の喜びが素直に喜べる人」「人に対して優しさや思いやりがもてる心豊かな人」になって欲しいとの願いが込められています。

一隅を照らす心豊かな人が集まれば、明るい社会が実現します。私たちが、それぞれの置かれている場所や立場で、自ら光り輝くことで、隣の人も光り、そして街や社会が光ります。一人の光は小さくても、その小さな光が集まって日本を、世界を、やがて地球を照らします。

回りの人に感謝し、常に思いやりを持って生活していると何不自由なく暮らすことができますが、自己のことばかりを考えて生活していると、他人への思いやりの心、信頼する心を忘れ、世の中は暗く寂しいものになります。

「一燈照隅」。この一年の平穩に感謝しながら、一隅を照らす人になれるよう努力したいと思う師走の頃です。

指宿市長 豊留悦男



▲指宿市民体育祭にて